

15 Dec. 2009



第37号

日米エアフォース友好協会

だより

Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会

〒162-0842 東京都新宿区  
市谷砂土原町 1-2-34KSKビル3F

編集：J A A G A 事務局

印刷：財団法人 防衛弘済会

ホームページ：http://www.jaaga.jp

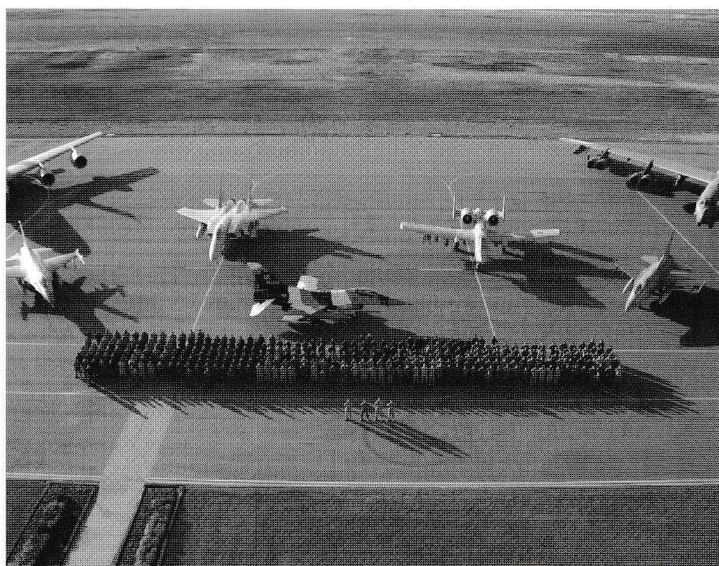
- 日米隊員の激励等（日米共同訓練参加隊員激励） ..... p 1
- 日米隊員の交流等支援（日米下士官相互部隊研修参加隊員支援） ..... p 2
- 米空軍軍人の日本研修等支援（米空軍軍人の日本文化研修支援、スペシャル・オリンピックス支援、  
ねぶた祭り参加支援） ..... p 2～p 4
- JAAGAと空自・米空軍との交流（SPORTEX'09A開催、第18航空団司令離着任式、  
第374空輸航空団最先任上級曹長送別会、横田基地司令歓迎会、米空軍協会（AFA）総会、  
米独立記念行事（横田基地）、アメリカ・フェスト2009、日米友好祭、エア・フォース・ボール） ..... p 5～p12
- 広報（賛助会員の横田基地研修） ..... p13
- 投稿記事 ..... p14
- 新入会員紹介、会員募集、編集後記 ..... p16

## 日米共同訓練参加隊員を激励

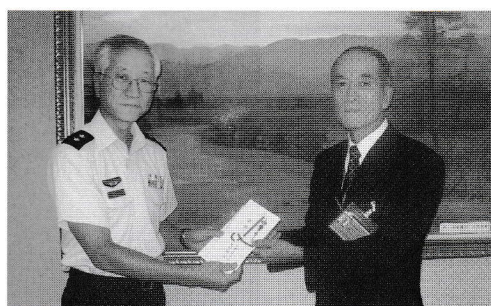
9月18日（金）午後、内山副理事長、石黒、射場、源理事が航空総隊司令部を訪れ、レッド・フラッグ・アラスカ参加者に対する激励品を飯田航空総隊司令部幕僚長に託し、訓練の成功を祈念した。今年度の演習は、準備等を含め9月23日～10月22日の間、実施され、航空総隊の人員約200名、F-15×6機、E-767×1機、携SAM

追随訓練器材×6セットが参加した。10月2日～17日の間は、米国アラスカ州アイルソン空軍基地及びエレメントルフ空軍基地並びに同周辺空域等において、防空戦闘訓練、基地防空訓練が行われた。

（源理事記）



2009 Red Flag Alaska



Visit Maj. Gen. Iida (ADC) to hand encouragement item to JASDF units



Air refueling by USAF tanker

## 日米下士官相互部隊研修参加隊員を支援

9月17日（木）午後、石黒、小川、田中、原田理事が廣中空幕人事教育部長を訪ね、平成21年度日米相互部隊研修（米空軍下士官の受け入れ）に対する支援品を手渡した。今年度の空自での受け入れ計画・実績は下表の通りであり、那覇、松島基地（教育集団）での受け入れは今回が初めてとなる。人教部長からは、日米の相互理解に年々有意義な研修となってきており、JAAGAの支援に大変感謝しているとの御礼が述べられた。

（原田理事記）

受入基地	期 間	差出基地	参加人員
那 覇	10.1～10.9	嘉手納	7
松 島	4/四半期	三沢	7
小 牧	4/四半期	横田	7



Visit Maj. Gen. Hironaka (ASO) to support JASDF-USAF NCOs exchange program

## 米空軍軍人の日本文化研修を支援



Nikkou tour , Yomeimon Gate

10月27日（火）、28日（水）、米空軍横田基地第5空軍情報・サイバー作戦部長他7名が日光方面を研修した。本研修は、宇都宮市内在住のJAAGA個人賛助会員である高柳實氏の全面的ご支援による第5回目となる研修であり、高橋、小川、射場理事が同行した。

米軍マイクロバスで横田基地を出発した一行は、東北

自動車道宇都宮ICにて高柳氏ご夫妻はじめ今回ご支援を頂く方々からの出迎えを受けた。危ぶまれた天候も、台風一過の素晴らしい日本晴れとなり、高柳昌喜氏（實氏の甥）と三浦日出夫氏（栃木県航空協会理事、防大4期）のご案内で日光へ。世界文化遺産の「神橋」研修の後昼食・休憩をはさみ待望の三仏堂、東照宮、二荒山神社の

研修を開始した。陽明門、三猿、眠り猫、鳴龍などそれぞれの場所で荘厳さと華麗さ、そして歴史の奥深さを実地に見聞しひと時を楽しんだ。特に、二荒山神社においては、「巫女の舞」鑑賞に引き続き、リカート大佐が研修団を代表して玉串奉てんを行い、全員で2礼・2拍手・1礼による日本神道の拝礼を行った。その後いろは坂を上り、華嚴の滝に感嘆の声を上げ初日の研修を終了、宇都宮市内の宿舎に到着した。夜は、寿司ダイニングを楽しみつつ、研修内容にとどまらず日米の文化等に関する話題を通じ大いに交流を深めた。

翌28日も上天気にも恵まれ、高柳ご夫妻案内の下、益子焼窯元と日本酒蔵元の研修を行った。まずは益子町の老舗窯元である関澤窯を訪ね、当主関澤武氏とご子息による直々の御指導で「絵付け」と「ろくろ」を体験、ユーモア溢れるアドバイスに米軍一行は大いに楽しみながら日本の伝統工芸に挑戦した。また、関澤窯ミュージアムの見学、屋敷内にある酒樽を利用した茶室や数々の盆栽、上り窯の研修、そして自然との調和と美の世界を大事にした伝統的な日本家屋を十分に堪能した。次に、市内の外池酒造を研修、工場見学を通じ日本酒の醸造工程の説明を受けた。醸造樽を攪拌する際、杜氏職人達が唄う民謡の実演に耳を傾け、時計のない時代に攪拌時間を計るストップウォッチの役目であったとの説明に、伝統と知恵の深さを感じたようであった。また、利き酒コーナーでは工程の違いによる異なる味わいの原酒などを試飲し

た。昼食は、お世話になった皆様やボランティアの通訳の方々にもご一緒いただき、稲刈りの終わった田んぼに囲まれたレストランにて、すき焼き、てんぷら、流しそうめんなど日本の食文化を満喫した。研修の終了に当たり、米側代表のプロット大佐から、「高柳氏はじめ沢山の方々の御配慮で日本文化などを体感する極めて充実した研修となったことは言うまでもなく、二日間を通じて『日本の皆様の温かなおもてなしの心』に触れる機会を得たことは最大の成果でした。」との謝辞があり、全員からの見送りを受け、横田基地に向け益子を後にした。

(射場理事記)



Sekizawa pottery , Mashiko-yaki

## スペシャル・オリンピックスを支援

### 【横田基地】



Kanto Special Olympics in Yokota AB

5月23日(土)、24日(日)、横田基地内のボンク・フィールドで関東スペシャル・オリンピックスが開催され、廣

瀬理事長、阪東理事が開会式に出席した。

今回も例年通り関東一円から約300名の選手の参加が予定されていたが、新型インフルエンザの影響から出場できない学校が出て160名程度の選手参加となった。日米両国国旗入場と両国国歌斉唱、大会委員長/第374空輸航空団副司令フランク J.イピッチ大佐の開会挨拶、福生市長の祝辞、支援団体等代表者紹介と記念品・感謝状盾の授与、ボランティアの介助を得た選手団入場、日米選手代表の選手宣誓“Let me win. But if I cannot win, let me be brave in the attempt!”に続く聖火点火と開会式は盛り上がり、各競技が開始された。

今年も、陸海空の准曹士自衛官延べ600名を含む1,000名以上のボランティア支援が大会運営を支えていることに日米関係の暖かみを感じると共に、各選手が真剣に競技に打ち込む姿に感動を覚えた。

(阪東理事記)

## 【三沢基地】

三沢基地におけるスペシャル・オリムピックスは、秋晴れの10月3日（土）、主催者の米軍三沢基地副司令のロバート・グレッグ大佐以下約200名と招待の「もみの木学園（37名）」、「かけはし寮（36名）」、「お助けマン・クラブ（5名）」が参加して盛大に実施された。JAAGAからは、山本事務局長が企画実行委員として活躍すると共に、丸山支部長がJAAGAの支援品をグレッグ大佐に贈呈した。

（丸山三沢支部長記）



Special Olympics in Misawa AB

## 米空軍軍人及び家族のねぶた祭参加を支援



Nebuta Festival in Aomori

8月4日（火）、三沢支部は恒例になった「米軍三沢基地のリーダー達及びその家族の青森ねぶた祭り参加への支援」を実施した。今回、スティルウェル団司令が業務多忙で、出発間際まで参加の可否が判らない状態であったが、緊急時用の車両を随伴させるなどの手当てをして、大型バスに団司令以下全員が乗車し、三沢基地を出発した。

青森のねぶた祭会場近くのホテルに到着し、関係者の出迎えを受け、別室において参加者34名の着替えを実施し、うちわを受領して「ねぶた祭」へ出陣した。「ねぶた祭」は、花火の合図で19時10分から始まり、太鼓の大きな音と笛の音色に乗り、地元の人達と一緒にハネ

トの輪を広げ、祭りを大いに盛り上げた。また、沿道の観光客からの声援もあり、約2時間の祭りを大いに楽しんだ。

21時に祭り終了の花火が上がり、興奮の余韻が残る中ホテルへ全員引き上げてきた。ホテルでは、特に子供達の人数の確認を確実にしつつ、汗で濡れている衣装の着替えをし、帰り際、うちわ・扇子及び「ねぶた」衣装で身に付けた花笠を記念品として頂き、感激の中、関係者の見送りを受けてホテルを後にした。今年で6回目の本行事は、米軍関係者に定着してきたことが大いに感じられた。

（山本三沢支部事務局長記）

## SPORTEX '09 A開催



SPORTEX'09A at Tama Hills G.C.

JAAGAの恒例行事であるSPORTEXが、10月2日(金)、米軍多摩ヒルズ・ゴルフ・コースにおいて開催された。JAAGAからは遠竹会長をはじめ正会員及び賛助会員の計49名、米軍からはライス第5空軍司令官以下スタッフ等28名が参加した。大会支援要員を加えると約85名が参加し、盛況のうちに実施する事が出来た。

5時過ぎから参加者、支援要員が会場に集合し、クラブハウスで朝食をして、競技開始の準備をした。6時半に、練習グリーン上で開会のセレモニーが行われた。

開会式で、遠竹会長からは、本大会への参加と支援に対する御礼とともに「雨が降っていますが、プレーを楽しみましょう。」との挨拶が行われた。また、ライス司令官からは、「JAAGAの皆様とともに競技できる事、米側の参加者を代表して御礼申し上げます。雨のコンディションでなければ、JAAGAのゴルフではないと思います。Hit Straight and Long.」と挨拶した。また、賛助会員を代表して神谷会員から「本大会を楽しみにしていました。日米友好の絆を一層深めるよう頑張りましょう。」との挨拶があった。

開会式後、それぞれのカートに日米混合で乗りスタートホールへ移動して準備に取り掛かった。7時にホーンの合図で一斉に競技が開始された。時折強く降る雨にも負けず、各参加者は日頃鍛えたゴルフ技術を競い合った。雨でグリップが滑るのか、ボールよりもクラブを速くに飛ばすプレーヤーもいて、名プレーや珍プレーがあり、

和やかなムードで競技を楽しんだ。プレー終了時には全身ずぶ濡れになり、下着まで着替えてから、昼食・歓談となった。

会食後、表彰式・閉会式が行われ、閉式にあたり、会長から「雨の中でしたが、プレーを楽しみながら、友好を深める事ができました。ライス司令官をはじめ、米軍からの参加者とゴルフ場スタッフそして競技役員の献身的なご支援に対して改めて御礼申し上げます。」と挨拶があった。ライス司令官からは、「本競技を主催していただいたJAAGAに御礼を申し上げるとともに、ゴルフ場スタッフに感謝します。」と挨拶された。今回も日米の友好の絆を深めつつ、SPORTEX'09Aは盛会裏のうちに終了した。

(双石理事記)



Opening Speech by Toutake

## 第18航空団司令離着任式に参加



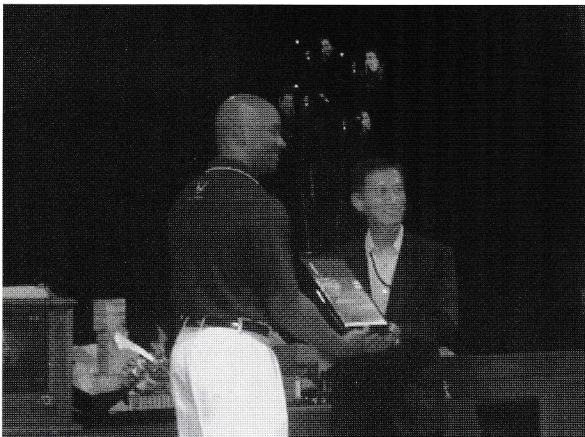
Change of Command ceremony of 18AW

7月9日(木)、第18航空団司令交代式が第5空軍司令官ライス中将を執行官として嘉手納基地の北側の格納庫で実施された。ライス中将から離任されるウィリアムズ准将の団司令としての働きに対する称賛の辞があり、その後後任のウイルズバック大佐に対し第18航空団司令官

としてその任務を忠実に果たし、チームカデナの益々の発展を祈るという激励の辞があった。ウィリアムズ准将は離任の挨拶の中で、ライス中将に対する謝辞、妻や子供への感謝、参加者への在任間の協力に対してのお礼の言葉のほか、外園空幕長から自分が受けた勲章は嘉手納基地に勤務する空軍兵、軍属や日本人従業員の協力によるもので自分一人の功績ではないと述べられた。最後に、皆様に、日本国、そして米合衆国に神のご加護がありますことを祈念し、離任の辞としますと言って挨拶を終わられた。そして、指揮官旗がウィリアムズ准将からライス中将に戻されウイルズバック大佐へ手渡された。引き続きウイルズバック大佐の着任の挨拶があり、指揮官機のF-15にウイルズバック大佐の名札が付けられ、「AIR FORCE SONG」を米軍参加者全員で斉唱して交代式は終了した。航空自衛隊からは平田南西航空混成団司令と渡邊第83航空隊副司令が参加された。

(石津沖繩支部長記)

## 第374空輸航空団ジョーダン最先任上級曹長送別会に参加



Farewell party for CCM. Jordan (374AW) at Yokota AB

7月24日(金) 18:00から横田基地下士官クラブで第374空輸航空団ライナス・ジョーダン Jr. (Linus Jordan Jr.)

最先任上級曹長の送別会が第374空輸航空団司令主催で開催された。会にはライス第5空軍司令官夫妻、アンジェラ副司令官夫妻、ヒックス第374空輸航空団司令夫妻をはじめ基地所在部隊等から多くの方々が参加され、米空軍が最先任上級曹長制度を重要視している様子を垣間見た。

航空自衛隊からは市ヶ谷、入間、府中基地所在の各部隊の准曹士先任10余名が出席し、日米准曹士が日米下士官交流や日米共同訓練等を通じ親交を深め、太い絆に発展しているように感じた。

パーティ後半の記念品の贈呈では、参加者それぞれが日本の思い出となる品々をプレゼントし、ジョーダン最先任上級曹長も最大級の喜びを表わしていた。

(阪東理事記)

## 横田基地司令ヒックス大佐歓迎会に参加



Welcome reception for Col. Hicks, Commander of 374AW and Yokota AB

8月6日(木)、横田基地司令兼第374空輸航空団司令マーカスJ. ヒックス大佐の歓迎会が、横田基地オフィサーズ・クラブにおいて福生・あきる野・瑞穂・羽村・武蔵村山各市町と横田基地との友好交流クラブ5団体主催により実施された。

歓迎会は、第374空輸航空団各群司令ご夫妻、各友好交流クラブ関係者等、多数の参加を得て、盛大に催された。

入間基地から池田中部航空警戒管制団司令、府中基地から河西防空指揮群副司令がそれぞれ参加されていた。JAAGAからは、越智副会長、阪東、山本、源理事が参

加した。

会は、あきる野市吹奏楽団キララバンドによる歓迎マーチで開始となり、日米両国歌の演奏、主催者歓迎挨拶等、乾杯、歓談と進められた。ヒックス大佐から感謝とお礼、そして、よろしく願いますとの丁寧な日本語での挨拶があると、会場から拍手喝采が沸き起こった。その後は、琴・尺八の演奏により日本文化が醸し出される中、各テーブルで米軍軍人を囲んでの和やかな雰囲気での歓談が行われ、20時過ぎに会の幕は閉じられた。

(源理事記)

## 米空軍協会(AFA)総会に参加

「つばさ会/JAAGA」を代表し、日米両空軍の更なる友好親善を期した「JAAGA訪米団」は、9月6日(日)から9月17日(木)までの間、遠竹JAAGA会長を団長として、香川、堀、永岩理事計4名で、太平洋軍司令部、太平洋空軍司令部(ハワイ)、米戦略宇宙空軍隷下の第14空軍司令部(バンデンバーグ基地・カリフォルニア)を訪問、その後、ワシントンDCで越智JAAGA副会長が合流、計5名でAFA年次総会に出席するとともに、国防省、空軍省、日本大使館等を訪問し意見交換した。

それぞれの訪問先において、日本での勤務経験のある米空軍現役将校やJAAGA名誉会員である歴代第5空軍

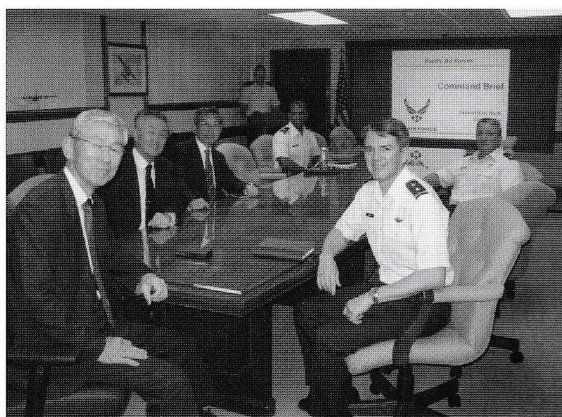
司令官等との旧交を温めるとともに、その貴重な財産ゆえの一步踏み込んだ情報提供を受けつつ活発な意見交換を実施することができ、日米ブルー・ユニフォーム間の信頼の絆を更に高めることができた。また、各研修を通じ、「AIR、SPACE、CYBERSPACE」において絶対優位を目指す米空軍の強い意志を随所に見ることができ、我が国のエア・パワー体制整備のあり方について貴重な示唆を得ることができた。

最初の訪問地ハワイでは、太平洋軍司令部、太平洋空軍司令部及び第13空軍司令部を訪問。それぞれ、戦略計画・政策副部長のフーパー陸軍准将、A3/5部長のジョ

アス少将、アターバック中将後任のカーライル中将を表敬するとともに双方の関心事項等について意見交換を行った。

フーパー陸軍准将は1989年の天安門事件当時から駐在武官勤務を含め計3回/8年の中国駐在経験を有しており、その経験を生かした今回の補職からも、中国の台頭に対する米軍の関心の高さを窺い知ることができた。

太平洋空軍では司令官のノース大将が不在であったため、第13空軍司令官カーライル中将、A3/5部長のジョアス少将等と情報交換を行った。なお、ノース大将とはワシントンDCのAFA会場で面談することができた。



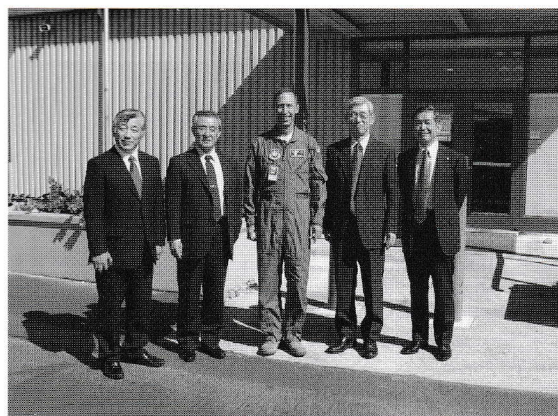
Exchange views at PACAF HQ



with Gen. North, Commander of PACAF, at AFA Convention

第13空軍は極東空域を含む西はインドから東は米本土西岸に至る広大な空域において航空作戦を主導する基幹の部隊であり、我が国周辺の空の守りのため或いは平時におけるエア・パワーの有効活用のため今後更に緊密な連携を構築する必要のある部隊である。ここでも「AIR、SPACE、CYBERSPACE」における優位確保と連携の重要性が強調されていた。

ハワイでの行動を終え、ホノルル空港を出発しロスアンゼルス空港に着陸。以降、陸路3時間の行程を経てバンデンバーグ基地に到着した。バンデンバーグ基地では前第5空軍副司令官であったジェームス第14空軍司令官(中将)を表敬訪問するとともに、軍事気象衛星打ち上げ間近のスペース・ランチ・コンプレックス3(SLC3)や第14空軍衛星指揮所(CSpOC)等を視察した。同基地は広大であり、敷地内に衛星発射施設を数箇所保有している。早期警戒、偵察、位置評定、衛星監視等々、宇宙における諸々の活動は米軍の運用にとっては常態ともいえるものであるが、宇宙基本法により衛星の防衛利用が解禁された我が国としても、限られた予算の中、今後大幅に努力投資していかなければならない分野であり、衛星活動に関わる米軍の体制・動向には引き続き強い関心を持つべきと考える。



Exchange views with Lt. Gen. James, Commander, 14AF (former Vice Com. 5AF)

ワシントンDCでは、14日、AFA年次総会開会式に出席、ダンAFA会長を表敬訪問した。また、同席で空軍参謀長であるシュワルツ大将とも懇談することが出来た。



Courtesy visit to Mr. Dunn, AFA president





with Gen. Schwalt, Chief of Staff, USAF

AFA年次総会には、現役空軍軍人、シビリアン、政府関係者、退役軍人及び軍事産業関係者等多数が一堂に会し、世界に冠たるエア・パワーこそ、米国の国益と国民の安全を守る基幹戦力であるとして喧々諤々の議論がなされており、米空軍の自負と底力を強く感じた。また、会場に隣接する巨大な展示ホールには軍事産業各社の最新技術力を紹介するディスプレイや装備品等の展示があったが、特に今回は無人機等、地上作戦の勝利に直接貢献できる空軍装備品の紹介や、宇宙及びサイバースペース等に関する先進技術の展示が目を引いた。



AFA Annual Convention

翌日は、国防省アジア・太平洋担当グレグソン国防次官補代理、A5X部長のルー少将、J5キャラハン准将等を訪問し、米国のアジア政策及び米空軍の現状並びに運用構想等を伺うとともにアジア太平洋地域の最近の軍事情勢等の説明を受け、意見交換を行なった。

グレグソン次官補からは、北朝鮮関連については、「戻ることの無い非核化」という目標に向けての同盟関係強化の重要性、中国関連に関しては、警戒心を忘れず「信頼できるステークスホルダー」としてのアプローチの重

要性、そして、東アジア太平洋地域安定のため、PKO活動や国際緊急援助も含めた日・米・韓の関係強化の重要性等についてコメントがあった。



Exchange views with Mr. Wallace Gregson, Assistant Security of Defense, Asian and Pacific Security Affairs

ルー少将からは、8月に新設されたグローバル・ストライク・コマンド(GSC)とエア・コンバット・コマンド(ACC)との任務上の棲み分けについて説明があった。基本的にGSCは核兵器の運用に関して責任を持つことになる。核軍縮が議論される中、毅然とした核優位の態勢を今後とも維持すべきとの認識に基づき、今般、GSCが新たに組織改編されている。また、イラク・アフガンの戦闘においては、近接航空支援(CAS)と情報・監視・偵察(ISR)が空軍の主任務となっている旨、紹介があった。今後イラクからは陸軍の撤退が促進されていくが、イラク軍の空軍が未だ体裁を整えていないこともあり、米空軍の撤退は最後になるのではとの見通しが示された。アフガンについては今後有人機、無人機を含め更に積極的な陸軍支援体制がとられることになる。

視察を通じ、次世代の戦いはサイバーウォーの様相を呈するとの懸念が随所で強調されていた。この見通しの元、米軍ではすでに宇宙空軍の下にサイバー専門部隊である第24空軍を新設しており、サイバースペース時代においても優位な態勢を確保すべく諸々の活動を積極的に推進している。

さて、藤崎大使にはかねてより日米空軍相互の交流に深いご理解を頂いているが、今年も公邸に、我々代表団とともに、マイヤーズ大将、エバハート大将、ワスコー中将、ライト中将等歴代の在日米空軍司令官ご夫妻及びジャンパー大将ご夫妻をご招待頂き、貴重な意見交換を

実施することが出来た。また、篠田公使と公使公邸で懇談した際、大使ご指導の下、日米ユニフォーム同士の固い絆を礎として、在日米軍経験者を中心とした信頼の草の根ネットワークを構築すべく各種活動を開始した旨、紹介があった。

JAAGA訪米団による視察・交流は、関係者の絶大なご支援により回を重ねるごとに内容が充実してきており、今回も名誉会員等との交流及び各地における意見交換等多大なる成果を得て無事終了することが出来た。

(永岩理事記)



Ambassador Fujisaki, Honorary members and JAAGA delegation at Ambassador official residence

## 米独立記念日行事 (横田基地) に参加



Independence Day 2009, Yokota AB

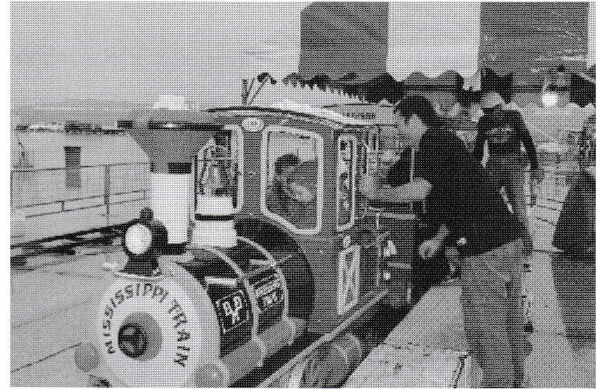
7月4日(土)、米軍横田基地において、「Independence Day 2009 (2009年米独立記念祭)」の催しが第374空輸航空団司令ヒックス大佐主催により行われた。本催しにJAAGAから廣瀬理事長、阪東、山本、射場、源理事及び石川会員が参加した。各種の行事は最後の花火まで終日行われたが、JAAGAメンバーは午後3時過ぎから参加した。第15番格納庫では、「AF Band Pacific Trends」の演奏が行われる中、ハンバーガーなどが提供され、米

軍人、招待者等が音楽と食事を楽しんでいた。途中、参加者への感謝とともに独立記念日を祝うヒックス大佐の挨拶があったほか、抽選会、ピエロのパフォーマンスなどもあり、盛りだくさんのイベントが行われていた。また、格納庫周辺では、子供の遊び場、動物ふれあい広場などがあり、家族連れで賑わっていた。

(源理事記)

## アメリカ・フェスト2009（嘉手納基地）に参加

7月4日（土）、嘉手納基地でアメリカ・フェスト2009が開催された。会場は滑走路の北側駐機場で、梅雨が明けた沖縄は快晴で駐機場からの照り返しが強く暑い日であった。航空自衛隊からは宮川第83航空隊司令夫妻、海上自衛隊からは小松第5航空群司令が参加されていた。11時30分、ウィリアムズ准将の挨拶でパーティーは始まった。ユーモアに溢れる准将の挨拶は招待者を何度も笑いの渦に巻き込んでいた。挨拶が終了すると各自がお皿を持って自分好みのハンバーガー作りをし、アメリカ風ハンバーガーの味を楽しんだ。今回の航空機展示の目玉はF-22であった。他の航空機は直接触れるように展示してあったが、さすがにF-22は直径40mにロープで囲ってあった。昨年に比べると出店数は増加したようだった



America Fest. 2009, Kadena AB

が、同時テロ以前の嘉手納のアメリカフェストに比し随分縮小されたフェストであった。

（石津沖縄支部長記）

## 横田基地日米友好祭に参加



2009 US-JAPAN Friendship Festival in Yokota AB

横田基地の日米友好祭が8月22日（土）、23日（日）に開催された。米軍及び自衛隊の航空機が多数展示されたほか、屋内・屋外のステージで横田サムライ太鼓、沖縄エーサ太鼓、ソーラン踊り、ロック演奏、太平洋空軍バンドの演奏等が行われ、天候にも恵まれ多くの市民が訪れた。

22日（土）、午後1時から下士官クラブに於いてレセプションが開かれた。横田基地司令（第374空輸航空団司令）ヒックス大佐の招待によりJAAGAから阪東、源理事及

び山岡、石川会員が出席した。米軍からはライス5空軍司令官、基地主要幹部、空自からは糸永府中基地司令、基地周辺市町首長、友好クラブ関係者等、多勢の方々が参集された。軽音楽が演奏される中で軽食、飲み物を楽しみながら和やかな雰囲気の中、歓談の輪が随所に出て日米友好祭に相応しいレセプションだった。途中、ヒックス基地司令から「横田基地友好祭にお越し下さりまして、有難うございます。心から歓迎します。基地司令に来て、4ヶ月が経ちましたが、友好クラブほか沢山の皆様と日米友好を楽しんできました。互いの理解を深めてきました。改めて皆様からのご支援とご協力に感謝申し上げます。今日は楽しいひと時を過ごして下さい」と、日本語で挨拶された。1時間ほどでレセプションは終わり、その後、エプロン地区の航空機地上展示等を見学し、友好祭の雰囲気を味わった。中でも、2機のF-22が展示されている周辺は見物の人ばかりであり、注目されている様子が伝わってきた。

ヒックス基地司令ご夫妻を初めとし、基地の皆さんの心温まる接遇に感謝しながら、基地を後にした。

（源理事記）

## エア・フォース・ボールに参加

### 【横田基地】

9月26日(土)、横田基地エアフォース・ボール2009が横田基地司令の主催で開催された。今年は、1947年に米陸軍航空隊から米空軍が独立して62歳を迎えた誕生祝いの大きな会であった。

公的行事の部では、日米国旗入場、両国国歌斉唱に続き、新しく太平洋空軍司令官に就任して部隊訪問中のギャリー L. ノース大將がスピーチをされた。「米空軍は創立50周年を機に各基地の道路に空軍栄誉章に称えられた英雄の名を付して伝統の礎にする試みが続けている。アメリカ国民の約1%の人達が軍務に就き、その多くは遠く国

を離れ海外に展開して態勢を維持していることが世界の安定に寄与していることに誇りを持ってもらいたい。また、米軍基地と駐留国即ち周辺地元との良好な友好関係維持は重要である。」等々、15分近くに及ぶスピーチに若い兵士達が姿勢を正して聞き入っているのには感じるものが有った。航空自衛隊からは、入間、府中等周辺基地の准曹士先任等約10名、それに米空軍交換学生が入校している空幹校SOC課程からWAFを含め8名の学生が参加していた。

(阪東理事記)



Air Force Ball in Yokota AB

### 【三沢基地】

米空軍創立62周年記念晩餐会が、米空軍三沢基地で9月25日(金)18:30から米空軍約600名及び米空軍基地司令招待の北空司令官以下在三沢の4将官及び三沢市長はじめ三沢市関係者約30名が参加して盛大に実施された。晩餐会は、国旗・軍旗入場、日米両国国家独唱の後、POW、MIAへのお祈りが実施され、厳粛な雰囲気で行った。その後、乾杯、ディナーと続き太平洋空軍音

楽隊の演奏で和やかに進行した。最後に退役軍人と現役軍人がそれぞれの過去、現在、未来についてスピーチを実施した後、三沢基地の過去、現在、未来のビデオが上映された。そして、スティルウェル大佐の挨拶で会は締め括られた。

(丸山三沢支部長記)

## 賛助会員の横田基地研修



Associate members visit Yokota AB

恒例のJAAGA賛助会員による米軍基地研修が9月30日(水)、横田基地において行われた。今年は法人及び個人賛助会員31名、JAAGA理事5名が参加し、総勢36名(団長：丸紅エアロスペース 八木達也氏)となった。

小雨がぱらつく中、9時半に福生駅から米軍バスで横田基地へ向かった。最初の訪問先は第515航空機動運用群。昨年6月、米空軍航空機動軍団隷下に横田で新設されたばかりであり、第730(横田)、第731(韓国)、第732(嘉手納)の3個機動中隊から構成されている。西太平洋において各基地に飛来する輸送機や民航機に対する整備、補給等を任務としている。ブリーフィングに続いて第730機動中隊の整備格や工具・部品等の保管庫を見学した。年中無休、24時間体制で勤務しているとのことであり、懇切な説明の端々に士気の高さが窺えた。

11時過ぎからバスに乗り、横田基地を一周するバスツアーに出た。きれいに刈り取られた緑地に点在する住宅、学校、病院、ホテルのような宿泊施設、大きなPX、映画館、レストランやファーストフード店など行き届いた施設の整備ぶりに、研修者の多くが異国を感じていたようであった。ツアーの途中でフェンスに囲まれ、大型クレーンが何本も立つ工事現場を通過した。23年度に予定されている航空総隊司令部等の移転に向けて工事が急ピッチで進んでいた。

ツアー終了後、オフィサーズクラブにおいてライス中將他米軍関係者を招待してJAAGA主催の昼食会が開かれた。最初に挨拶に立った司令官は研修団の横田訪問を

歓迎するとともに、日頃のJAAGAの活動に対して感謝の意を述べられた。その後各テーブルでは招待者を交え約1時間に渡って、様々な話題に花が咲いた。

午後からの研修のトップは第5空軍司令部。ライス中將、アンジェレラ准將他幕僚出席のもと、ホール少佐の流暢な日本語によるブリーフィングが実施された。説明終了後、会員からの質問に対しては司令官自ら丁寧に回答していただいた。

14時過ぎから再びバスに乗り、米軍放送局(AFN)に向かった。AFNは、海外基地在住の米軍人及びその家族へテレビやラジオを通じて情報や娯楽番組を提供する組織である。メディア部長ハミット氏の歓迎挨拶の後、2グループに別れ、スタジオやオンエア中のラジオブースの中など隅々まで案内していただいた。かつてFENと呼ばれていたころリスナーであった会員の一人は、その放送局を実際に訪れ感慨深げであった。

最後の研修先は第374輸送航空団司令部。ここは太平洋地区における空輸を一手に引き受けるとともに、横田の基地業務を担当する部隊である。ワット少佐による歓迎の挨拶に続いて、横田基地及び輸送航空団の概要についてブリーフィングを受けた。

16時に予定通り全ての研修が終わった。参加者は丸一日、普段あまり馴染みのない米軍基地の中で過ごし、米軍人と直接話をする機会を得、米軍や日本の安全保障問題に対する認識を大いに深めることができた。

(古畑理事記)

## 米国における国家安全保障会議と国防省との関係

(平成19年から21年までの2年間、ハーバード大学の客員研究員としてボストンに在住した永岩理事からの寄稿)



National Security Act Amendment, 1949

米国の国家戦略や安全保障政策を理解するには「国家安全保障戦略」や「QDR」「国家防衛戦略」等を通観する必要があるが、同様に、あるいはそれ以上に米国の諸政策がどのようなプロセスを経て意志決定されてきたかという背景を掌握しておくことが肝心である。特に、軍の運用に関わる意志決定過程に際し、米国の国家安全保障会議（以下、NSC）と国防省とがどのように関わりあってきたかということを確認しておくことは、我が国の危機管理やシビリアン・コントロールのあり方について考える上でも大いに参考になる。

米国のNSCは大統領を議長とし、大統領の意思決定に資するために存在している。制度上のメンバーは大統領、副大統領、國務長官および国防長官であり、統合参謀本部議長は防衛全般に関し、国家情報長官は情報全般に関するアドバイザー役を担任している。大統領にとってNSCは米国の国家安全保障政策及び外交政策を大統領の補佐官共々取り纏める基幹的な組織である。1947年の「国家安全保障法」によるとNSCは「国家安全保障に関わる国内政策、外交政策および軍事政策について国防省その他関係省庁がより効果的に連携して政策を取り纏め大統領に対して適切な助言を実施」とされている。また、「安全保障に関わる政策調整をより効果的に推進するための大統領特命事項を実施」することになっている。NSCは「状況を分析し国家目標を明示すると共に介入の可否に関わる分析、米国にとってのリスク分析を実施」とすると共に「米国の国益を確保する政策を立案」する責務を有している。

では、NSCと国防省の連携プロセスとはどのように理解したらよいのであろうか。それらについて理解するためにまず国防省の歴史と現在の組織に至った経緯を概観してみる。

1940年代後半まで、米国には国防省の存在は無く、統合参謀本部議長の権限も明確にされていなかった。また、第2次世界大戦を通じて陸軍（War）と海軍（Navy）の2つの省しかなく、陸軍長官及び海軍長官は各々別個に大統領に報告していた。陸軍と海軍の間には、資源の配分、戦略の優先順位、軍の運用要領、戦闘指揮等に関してしばしば深刻な対立が発生しており、両者の連携を確保するため約75もの委員会が存在したといわれている。これらの臨時の委員会はそれな

りに機能したが、豊富な資源力が両者間の調整の不具合を目立たなくしていたに過ぎない。

終戦後、1949年の国家安全保障法により国防長官を長とするナショナル・ミリタリー・エスタブリッシュメント（NME）が設立され、新設の空軍省を加えた3軍の省が生まれた。国防長官の権限は「一般的な方向付け、権限、統制」に留まり、3軍は権限を維持していた。時を同じくして、大統領を議長とし、國務長官、国防長官、空・海・陸軍長官及びナショナル・セキュリティ・リソースズ・ボード長官をメンバーとする国家安全保障会議（NSC）が設置された。当初のNSCにおいては7つのポストのうち4つを軍が確保していたこともあり、軍の意向が強く反映されていた。

NMEは1949年の国家安全保障法の見直しによって国防省に再編され、その際、国防長官の権限を拡大し軍の権限を縮減すると共に、3軍を統括するとして指揮権は有しない統合参謀本部議長を配置した。同時にこの見直しにおいて3軍の長官をNSCのメンバーからはずしている。

アイゼンハワー政権の時に、国防長官の権限を更に拡大する関連法案を通して。アイゼンハワー大統領は軍における経験から、中央集権の重要性及び明確な指揮系統の設定を徹底して強調した。権限を有する国防長官の下にやや権限の少ない統合参謀本部議長を配置するという組み合わせは1960年代から70年代のマクナマラ長官の時代まで継続した。統合参謀本部議長の権限を強化するのは1986年のゴールドウォーター・ニコルス法以降のことである。以前の統合参謀本部議長は単に4軍の代表者に過ぎなかったが、ゴールドウォーター・ニコルス法はその権限を強化し大統領、NSC、国防長官に対する第一の助言者と位置づけた。ゴールドウォーター・ニコルス法はまた戦闘部隊指揮官の権限を強化すると共に、大統領から国防長官を経て統合部隊指揮官に至るといった指揮系統を明確化した。この措置は3軍の長官や各参謀長の権限を更に弱めることに繋がった。

現在、国防省は国防長官及び統合参謀本部議長に権限が集約された組織となっている。国防長官及び統合参謀本部議長には「軍に対するシビリアン・コントロール」の原則が適用



National Security Council

され、最終的な責任は国防長官に帰着するようになっている。統合参謀本部議長は軍の最高位に位置づけられているが、法の定めにより軍の指揮権は有していない。統合参謀本部議長に戦闘部隊の指揮権を持たせなかったのは、議会在、議長の権限があまりに強化されすぎると懸念を示したためといわれている。

歴史的にみると、国防省の統一見解を求める大統領や軍種ごとに意見聴取することを好む大統領と、時の大統領によって千差万別であった。ブッシュ大統領の時には、通常、国防長官と統合参謀本部議長との意見の相違も含めすべての意見を聴取することを好んでいた。しかしながら、危機発生時にはそのようなわけに行かず、例えば9.11のテロ攻撃以降、国防長官と国防副長官が大統領補佐官戦略会議で各々の意見を述べた際「国防省からは一人のみの報告にせよ」と注意を受けている。国防省の幹部は「OSDのシベリアンと軍が連携してその結果を一人で報告しなければならないとしたら国防省内の議論をもっと精緻にしなければならない。」としている。

その他の意見相違は1990年8月イラクがクウェート侵略した際にも発生した。大統領との会議のあと、チェイニー国防長官はパウエル統合参謀本部議長に以下のように注意している。「君は統合参謀本部長であって国務長官ではない。もちろん安全保障担当補佐官でもない。それに国防長官でもないので統合参謀本部長の所掌範囲に限って報告すべきである。」

このことはしかし、軍幹部が省庁間の会議において発言してはいけないといっているわけではない。むしろ軍幹部は、軍の状況等について知りうることを仔細にかつ積極的に発言すべきであるとされている。「軍幹部は寡黙すぎる。」としばしば批判されているが、その理由は（特に、より下位の幹部の場合）その発言が統合参謀本部議長の意見であるとみなされるのを嫌う傾向にあったり、個人的に不慣れな環境において萎縮したり、また、軍人は軍に関すること以外みだりに話してはならないと固辞する者もいたようである。NSCの下部組織であるDCのあるベテランメンバーによると「軍幹部は国家安全保障問題に関して更に広範囲（国家資源から経済問題、国土防衛、紛争、避難民、移民等）に教育を受けており、それが如何に軍の役割と任務に影響するかを理解することが必要である。昨今、特にこのような一見非軍事的なことが軍にとって重要な任務になってきた。」と軍幹部の積極的な発言を求めている。

このように、米国では軍人（議長もしくは責任ある地位の幹部）の専門的アドバイスは極めて重要であると認識されている。それは、省庁間の会議において、多くのシベリアンが概して軍の運用に関して十分な知識を有していない場合が多く、また表面上の成果以外その背景にある実態が十分に把握されていない場合が多いと考えられていることによる。このような認識の下、軍幹部は、軍事力の活用により、何が達成でき限界は何かについて虚飾を避けつつかつ簡潔に説明することが期待されている。同時に、議論が結論に至る際、軍に命下される達成目標についてしっかり確認しておかなければならないとされている。国権発動としての軍事力行使の議論がなされている場合、このことは特に重要となる。

外交政策における主管は国務省であるが、省庁間における実務調整をし、具体的な外交政策を推進するのは国防省であ

り、国防省の予算や資源を駆使してこれらの任務遂行にあたる。しかしテロリズムとの戦いであるアフガン及びイラク戦争においては、多国参加の有志連合の関係もあり、国防省と国務省の役割は同等とされている。歴史的に言えば、国防省のほうが概して戦争介入には拒否的であり、憲法に許された任務か否か、軍以外の他の手段（他国軍、国連、NGO等）はないか等、特に気にしている。そのような場合、国防省の立場は、その任務を遂行する上で必要な能力を有しているか、或いは、国益に純粋に合致した任務かを最優先に考えることを軸として対応しているといえる。

軍事力を活用するという最終的な判断は国防省によるものではなく政治的判断である。例えば、1992年ソマリア飢餓対応の人道支援任務で米軍を派遣した際、米中央軍の戦闘指揮官は、より蓋然性の高い中東全般の脅威に対する態勢維持に悪影響を与えると進言した。しかし、当時の米国政府の人道支援遂行に対する強い政治的な関心から、国防省の意図を無視する介入を意志決定した。

国防省の第2の関心は兵站の重要性である。政治家は、NSCに命ぜられた軍の行動に必要な諸経費について概して無関心である。速やかに行動しなければならないことに注意を取られ、軍の行動に伴う必要経費について考えることを忌避してしまう傾向すらある。「国防総省が必要な資源はすべて持っている。」という誤解も無いわけではない。

米国のNSCと国防省との関係について概観してきたが、米国ほど危機管理に関わる意思決定システムを大統領交代の度ごとに大幅に変更させてきた国家は他に無い。それは、大統領の最終的な意思決定を如何に時代や状況変化に適合させるかという深刻な試行錯誤の連続であったのであろうと考える。その変革意識は現在も続いており、オバマ大統領は就任後直ちにジェームス・ジョーンズ大統領安全保障担当補佐官にNSCの大幅な見直しを命じている。国家の安全を確保することは国家の最大優先課題である。米国の歴代のリーダーたちは、国家の存続をかけて国家としての安全保障管理体制のあり方を模索し続けてきた。軍事力の管理を如何に適切にするか、その能力を如何に最大活用して国益を追求するかという議論はそれらの中の中心的課題であり続けてきたといえる。

我が国においても安倍政権当時「日本版NSC」構想が提唱され注目を集めたが、その後の政権においてこの議論はものの見事に霧散してしまった。霧散した理由が「我が国の危機管理システムが万全であり時代の要請に十分適合しているから」というわけではあるまい。日米両国の危機管理システムは大統領制と議院内閣制という違いはあるものの、国家の存続を掛け、リーダーの意思決定を適切にするという課題は共通である。平時における制度の変革には多大の困難が伴うが、米国の反省を他山の石としつつ、我が国の現在の意思決定システムが時代に適合したものでどうかを日々真摯に自問し続ける必要がある。民主党政権に替わり、国家戦略局が平成21年9月18日、内閣官房に設置されたが、今後の議論を経て法制化されるであろう「国家戦略局」が看板どおり「我が国の国家安全保障に関わる国内政策、外交政策および軍事政策について防衛省その他関係省庁がより効果的に連携して政策を取り纏め内閣総理大臣に対して適切な助言を実施」し、また、「安全保障に関わる政策調整をより効果的に推進するため内閣総理大臣の特命事項を実施」できる組織に成長していくことを期待したい。

## 新入会員紹介

### 1 正会員

氏名	住所	氏名	住所
高橋 文明	印西市	菊川 忠継	千葉市
松下 睦裕	越谷市	桃木 正幸	練馬区
井上 勝	狭山市	山地 英一	茅ヶ崎市

### 2 個人賛助会員

氏名	住所	氏名	住所
一戸 栄司	八戸市	Ronald Lopez	千代田区
赤岩 芳彦	多摩市		

### 3 法人賛助会員

氏名	住所
(有)データーコスモ	中央区

## 会員募集

今期は関係各位のご努力で正会員6名、個人賛助会員3名、法人賛助会員1社の合計10名の入会を得ることができました。会勢拡張目標を正会員300名、個人賛助会員50名、法人賛助会員50社と定め精力的に活動しておりますが、正会員数が246名(21.12.1現在)と目標にはるかに至っておりません。

今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、個人会員の入会につきましては、次のとおりです。

推薦若しくは情報提供を頂いた方には直接会員担当係から連絡させていただきます。

#### 【入会資格】

正会員：航空自衛隊のOB

個人賛助会員：航空自衛隊のOB以外の方で、正会員3名の推薦が必要です。

#### 【連絡先】

○郵便 〒162-0842 新宿区市谷砂土原町1-2-34 KSKビル3F  
日米エアフォース友好協会 会員担当 行

○(会社)メール、電話

石渡 幹生 : m-ishi@shimadzu.co.jp 03-3219-5638

美馬 博 : h-mima@zp.jp.nec.com 03-3353-9720

松田 和彦 : kazuhiko\_matsuda@mhi.co.jp 03-6716-4433

## 編集後記

前36号を発行して以降、我が国では歴史的とも評される政権交代が行われ、マニフェストの実行を旗印に改革、見直しの風が吹いています。そんな中、来年、日米安全保障条約締結50周年を迎えることとなります。今後とも日米安保が我が国防衛の基調とされることに変化はないものと信じていますが、政策の行く末と米国の対応について注目していかなければなりません。そして、JAAGAは創立14周年となるわけですが、その設立の目的とこれまでの活動実績から、現情勢下、JAAGAの役割は益々重要となり、期待されるものが大きくなっていくのではないかと考えます。「だより」の編集担当といたしましては、JAAGAの各種の活動状況の紹介をより一層充実させて、御理解、御支援、御協力を賜ることができるよう努力して参る所存でありますので、よろしく御願い申し上げます。

編集者一同